喰われるアイドル
魔界に捕らえられ激しい凌辱の後に
貪り喰われる美少女達
作者
大黒達也

喰われるアイドル

作者　大黒達也

『あらすじ』

日本で最も人気があるアイドルグループのメンバーが中国公演の途中で行方不明となる。可憐なアイドル達を呑み込む暗黒の世界。彼女達を待ち受けていたのは甘美で残酷な運命であった。

『登場人物』

秋元(あきもと)すず菜(な)

アイドルグループのセンターを務める日本のトップアイドル。可憐な容貌と抜群のスタイルでありアイドル界ではトップレベルの歌唱力の持ち主。二十歳になったばか

り。

大石美奈（おおいしみな）

すず菜の友人であり、理知的で美しい容姿の持ち主。ダンスが得意で頭脳も明晰でありアイドル業の傍らニュースキャスターも務める。年齢は二十二歳。

大野（おおの）ゆかり

グループ最年少の十八歳。グラマーなスタイルで愛くるしい容貌を持つ。メンバーの中で最も明るい性格。バラエティには多く出演している。

桜井忍（さくらいしのぶ）

グループ最年長で今年二十三歳になる。落ち着いた性格

で面倒見が良くメンバー全員から慕われている。モデルのような美しい容姿の持ち主。

その他のメンバー

『目次』

第一章　拉致
第二章　人肉パーティ
第三章　生贄
第四章　亡者の餌

『本編』

第一章　拉致

すず菜達一行を載せた大型バスは、中国の地方都市であるK市を目指していた。

すず菜が所属する人気アイドルグループは中国政府より招かれ、中国国内の所要都市を巡る公演の最中であった。

周囲は鬱蒼とした広葉樹林の森であった。この場所には高濃度スモッグ等の大気汚染は見られなかった。時刻は夕暮れ時。木々の合間から西日が差し込んでいた。

季節は夏の盛りであり気温は三十度以上になっていた。

大型バスの車内は冷房が効いているのだが、一旦バスを出ればうだるような暑さであった。皆、尻が見えそうなホットパンツやミニスカートを履き、薄手のタンクトップの前は豊かな乳房で弾けそうな感じだった。デニムのホットパンツやミニスカートからはみ出した白い太腿はすべすべで若さが凝縮されていた。

メンバー達はファッションや食べ物の会話で盛り上がっていた。時には下ネタも聞こえてくることもあった。

グループのセンターを務めるすず菜は、今年二十歳になったばかりだ。

色白の肢体に長い手足を持ち、乳房や尻は豊かに盛り上がっていた。細面の顔に鼻筋がとおり切れ長の二重瞼を持つ美しい顔立ちだった。

地方公演にはすず菜の他にメンバー十人が参加していた。皆十代後半から二十代前半と いう若さであった。

メンバーの他に中国籍のマネージャーが参加していた。林杏（りんしん）という名前の四十代半ばくらいの女で、痩せ過ぎの身体であり、度の強い黒縁メガネをかけていた。

最近雇われたばかりで普段は無口、いや不愛想と言える性格だった。マネージャーにも関わらず、グループのメンバーとは、仕事以外ほとんど会話をすることは無かった。

しかしすず菜にだけは深い関心があるようだった。

グループと同行するときは、すず菜のことばかり見ていた。度の強い黒縁メガネのレンズ でよくは見えないが、女が女に向ける視線では無かった。明らかに熱を帯びていた。

「やっぱり、故郷はいいや！皆楽しんでいるかい？可愛いすず菜ちゃんは元気かな」

普段は陰鬱ともいえるマネージャーのリンシンが伸びをして大きな声を上げた。

すず菜の席に来て、ムチムチの太腿に右手を置いて、すず菜の顔を舐めるように見詰めた。

「調子はいいですよ」

すず菜は内心、リンシンの馴れ馴れしい態度に軽い怒りを覚えていた。

同時にリンシンの変貌に少し混乱していた。リンシンの右手が、すず菜の太腿を軽く摩るようにした。驚いたことにミニスカートの中に手を差し込もうとした。

「何するんですか？」

両手でリンシンの右手を押えた。

「冗談だよ。すず菜ちゃん。怒った顔も可愛いね」

手を離したリンシンが席に戻ろうとしてから、不意にすず菜の膝に座り、身体を引き寄せ唇に吸い付いてきた。

「何するのよ。アンタ！」

隣に座っていたすず菜の友人である美奈が、大声を上げリンシンを引き離そうとした。

リンシンは痩せている割に以外に力は強く、片手で美奈の手を払い、頬に平手を叩き つけた。美奈は仰け反るようにして椅子の上で意識を失った。口元から血が滴り落ちていた。

一瞬で車内は騒然となった。恐怖の余り泣き出すメンバーもいた。

「運転手さん。助けてください！」

運転席近くに座っていたメンバーで最年少のゆかりが、中年の中国人運転手に助けを求めた。

運転手が振り向き、ゆかりに向かって不気味な笑みを見せた。前歯が数本抜け落ちていた。

「お嬢ちゃん。大人しくしていた方が身のためだよ」

流暢な日本語で話しかけられた。

「誰か警察に電話して！」

メンバー達のリーダー格である忍が立ち上がって大声を上げた。

「残念だね。ここはスマホ通じないんだよ。大人しくし

ていないと、忍ちゃんもオバちゃんの玩具にしちゃうよ」

リンシンが勝ち誇った顔で笑った。すず菜のタンクトップは捲りあげられ豊かな乳房がむき出しにされていた。すず菜は恐怖に顔を引き攣らせ、泣き弱っていた。ひ弱なすず菜は抵抗することも出来ず、為すがままだ。リンシンは狂ったようにすず菜の白く柔らかい乳房を舐め回した。片手はすず菜のスカートに差し込まれ、膣を弄っており淫らな音が聞こえていた。

周りにいたメンバーは恐怖のあまり身体が動かなくなっていた。ただ、顔を両手で塞ぎ嗚咽を漏らしていた。

信頼すべきマネージャーの行為とは思えなかった。誰もが、精神に異常を来したと思っていた。

「リンシン姉御。村に着いたぞ」

運転手が、のんびりとした口調でリンシンに話しかけた。

「何だ。もう着いたんだ。もうちょっと遊びたかったね」

すず菜から離れ、窓の外を見詰めた。時刻は十九時を過ぎていて辺りは薄暗かった。

バスは森の中に突然現れた建物の前に停車した。二階建ての建物は総レンガ造りで、壁には一面苔が生えており、建てられてから相当の年月が経っているようだ。

建物の正面にある大扉がゆっくりと開かれた。バスは

内部へと侵入して行った。

内部は三百坪ほどもあるレンガが敷き詰められた中庭だった。建物は中庭を囲むよう に作られていた。

バスは中央に止まった。建物にはいくつもの扉が付いており、一斉に開かれた。

中から見すぼらいい格好をした数十名の老若男女が現れた。

「さあ降りるんだよ」

リンシンは、全裸に剥かれ茫然自失となったすず菜の腕を強く引っ張った。

「ここはK市じゃないわよ。どこなの？」

忍が立ち上がり、リンシンに詰め寄った。忍の表情は

青ざめ肩先が震えていた。

「アタイの故郷だよ。それがどうかしたかい？」

「私達はK市に向かっていた筈よ。いったい何考えているの？それにすず菜ちゃんをこんな目に合わせて。アンタは私達のマネージャーなのよ」

「ふん。マネージャーだって。それはさっきまでのことだ。今はお前達の飼い主さ」

「飼い主ってどうゆうこと？」

忍の背後からゆかりが顔を出した。

「飼い主は飼い主さ。お前たちは豚や鳥と同じなんだよ。それにしても美味しそうだね。早く食べたいよ」

リンシンは、両手で乳房を押え震えていたすず菜の手

を押し退け、盛り上がった乳房を鷲掴みにした。

「食べるって？何言っているの？こんなことしてただで済むと思っているの？」

失神から目覚めた美奈がすず菜を抱き寄せた。

「ウザったいね。陳早くこのメス豚達を降ろしてちょうだい」

「わかったよ。皆も手伝ってくれ」

陳と呼ばれた運転手が、窓から顔を出し、バスを取り囲んでいた男女に中国語で声をかけた。

屈強な体つきをした中年男が数名、バスに侵入してきた。車内はメンバー達の泣き声や叫び声で騒然となった。獰猛な顔つきをした男達は有無を言わさずメンバーを座

席から引き剥がした。か弱い女達は抵抗することなどできず、為すがまま、抱えられるようにして車外に運び出された。

腰が抜けて動けないメンバーは、肩に担がれて車外に運ばれた。ミニスカートがめくれ、小さな下着を付けた白い尻が丸見えになっていた。

すず菜はリンシンに腕を引かれるようにして車外に出された。他のメンバーも全員、車外に引きずり出された。周りを数十人の男女が取り囲んでいた。

皆、全裸に剥かれたすず菜の裸身を食い入るように見

詰めていた。中には、背後から豊かな尻に手を差し込んでくる者もいた。アヌスに指を入れられ、背筋を仰け反らせ泣き叫んだ。周囲の男女は、咎めることもなく薄ら笑いを浮かべるだけだ。

最年長と思える白髪で髭を生やした老人が前に出てきた。

「リンシンよ。出かしたぞ。最高の肉を手に入れることができた。今夜は祝杯だ。

陳。取りあえず、ひとりを潰して極上の料理を作ってくれ」

「了解しました。この女背が高くて肉がいっぱいとれそうです」

陳は、最年長で二十三歳になるリーダーの忍を背後か

ら押えつけていた。いきなり着ていたタンクトップを片手で引き裂き、ブラジャーを引き千切った。

「嫌！」

忍の絶叫が中庭に響き渡った。陳はお構いなしに、今度はミニスカートに手をかけ、引きずり下ろし、小さなパンティを紙のように引き千切った。シミひとつなく豊かな乳房と尻を持った極上の裸身が曝け出された。陳は泣き叫ぶ全裸の忍を軽々と肩に載せ、大きな煙突がある棟の扉を開け、中に入っていった。

すぐに忍の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。少しすると泣き声が、喘ぎ声に変わった。

「あいつ。仕事の前に楽しむつもりだね」

リンシンが淫らな笑みを浮かべ、すず菜の盛り上がった乳房を鷲掴みにした。

第二章　人肉パーティ

グループのリーダを務める忍が陳によって連れ込まれた場所は、食肉加工処理場であった。

部屋の片隅には、金属製のテーブルが置かれ、その上には解体され、全身の肉を引き剥がされた豚の死骸が横たわっていた。解体された肉は、天井から吊り下げられていた。

陳は泣き叫ぶ忍を部屋の中央にある金属製の調理台に

仰向けの姿勢で横たえ、両手を調理台の脚に結び付けられたワイヤーロープで縛りつけた。

すべすべで雪のように白い忍の裸身が、調理台の上で震え戦いていた。寝ていても豊かな乳房は盛り上がったままだ。

部屋には陳と忍の他にもう一人の若い女がいた。血塗れの作業着を着た痩せ型の体型をしてい た。女は、別の調理台で肉切り包丁を砥石で研いでいた。女が手を休め、忍の方を見た。

忍の盛り上がった乳房を食い入るように見詰め、生唾を呑み込んだ。

「工場長。その女が今夜の晩餐で食されるのですか？」

女は忍の顔を見ながら、流暢な日本語で話した。まるで忍に聞かせたいかのように。

「そうだ。これから十分に楽しませて貰ってから、肉を捌いて、料理の食材に使う」

陳も忍の顔を見詰めながら日本語で答えた。

「食材？私の肉を食べるつもりなのですか？」

忍が、嗚咽を押えこむようにして、絞り出すような声で言った。

「ああ。美味しく頂くつもりだよ」

「人が人間の肉を食べるなんて信じられない。冗談でしょう？」

「知らなかったのか？この国では数十年前まで人肉を

食べていたんだよ。若い女の肉は羊肉より旨いんだ。実際最高だよな。マーメイ？」

「最高ですよ。特に若い女のオマ＊コ肉は大好物です。コリコリ感が堪りません。でも工場長。野菜や果物だけで少しの間、飼った方が肉質が良くなるんじゃないですか？」

陳からマーメイと呼ばれた女は、研いでいた包丁を調理台の上に置いて、忍の近くにやってきた。おもむろに忍の盛り上がった乳房を鷲掴みにした。忍がマーメイの顔を睨み付けた。

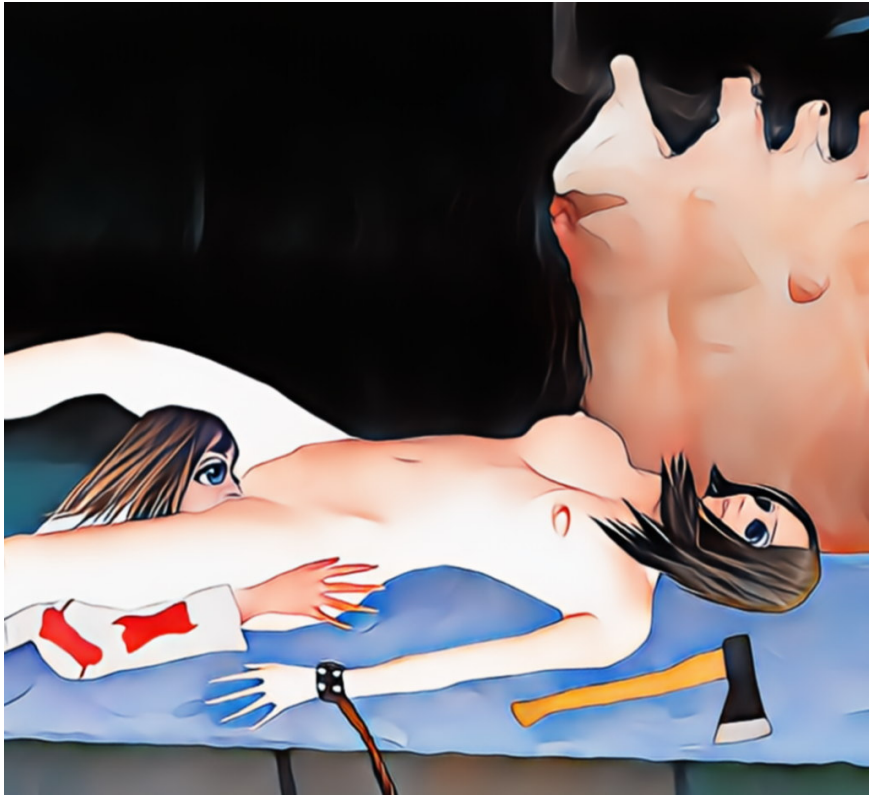
「この忍という女は、菜食主義者なんだ。それに国内ツアーの間、マネージャーのリンシンが中国の食肉は危険だと言い聞かせて、肉や魚は食べさせていないんだよ。皆、中国食品の怖さは知っているからね。安全なフィリピン産のマンゴーやバナナの食事だけで我慢していたのさ」

「さすが、工場長。悪知恵が働きますね」

マーメイが忍のむき出しにされた股間に顔を近付けながら言った。

「悪知恵はないだろう。それにリンシンのアイデアなんだ。まあいいか。今日連れてきた女達は、皆食べ頃という訳さ」

陳が話している間、忍の股間に鼻を付けて深呼吸するように息を吸った。細い舌で膣周辺を舐め回した。



「この女のオマ＊コ。いやらしい匂がするわ」

「止めて！変態女。こんなことをして無事で済むと思っているの？」

「警察のことか？そいつは心配することは無い。兄さんがこの地区の警察署長なんだよ。今晩もパーティに参加するんだ」

陳が忍の盛り上がった乳房を鷲掴みにしながら勝ち誇ったように言った。

「工場長。女の尻が見たいです」

「マーメイは、本当に若い女が好みなんだな。いいさ。俺が入れやすくなるようにたっぷりと舐めてやってくれ」

陳が忍の両足首を掴んで大きく上に持ち上げ、まんぐ

り返しの格好にさせた。

「嫌！止めて！」

股間が丸出しになり、白い両足が大きく広げられ豊かな尻が天井を向いていた。マーメイが調理台の上に座り、忍の腰に両手を回した。目の前には忍のサーモンピンクのアヌスがむき出しになっていた。

「きれいな穴ね。どんな味がするかしら」

淫らな笑みを浮かべながら、泣き叫ぶ忍の尻に顔を埋めた。細い舌先でアヌスを突いた。

舌先の動きに合わせるように白い豊かな尻が震え戦い

た。

「美味しいよ。お前の肛門はアタイが食べてあげるからね」

忍の愛液に塗れた顔を上げ、再び深い尻の割れ目に顔を落とした。狂ったような勢いでアヌスを舐り始めた。

陳は鼻歌を歌いながら、近くの調理台でタマネギやニンジン等の野菜を切り始めた。

「そうだ。この女の太腿肉で極上の餃子や肉団子を作ろう。胴体は、米や野菜を詰めて蒸し焼きがいいな」

「いいですね。この太腿柔らかくて、最高の食材ですよ」

女は、まんぐり返しにさせた忍の膣に指を出し入れさせながら笑った。忍は既に何度か逝かされ、茫然自失の状態だった。

「そうか。野菜の下拵えは終わったよ。今度は俺が楽しむ番だ。蒸し釜の火を熾してくれ」

「いいわ。交代しましょう」

女は、少し名残惜しそうな顔をして、忍の裸身から離れた。

代わりに陳が、作業着を脱いで全裸になった。中年太りではあるが、股間の黒々とした一物は節くれ立ち長さが三十センチ以上はあった。

調理台に横たわっていた忍が、我に返った。陳の股間に視線が集中した。これほどの巨根は目にしたことがなかった。忍にはあまり男性経験が無かった。所属会社の方針で男女交際は禁止されていたのだ。忍は、恐ろしさのあまり、調理台の上で身体を強張らせた。

陳は淫らな笑みを浮かべながら忍をうつ伏せにして、盛り上がった尻の深い割れ目に顔を押し込み、アヌスを激しい勢いで舐った。アヌスに満足してから、今度は仰向けにして、膣を貪った。忍は両手で顔を覆い、咽び泣いていた。

「若い女は美味しいよ。これから楽しませてもらってから、美味しく調理してやるからな。お前の美しい身体は

俺達の食欲を満たしてから糞になるんだ」

陳は、忍の両腿を押し広げ、一気に挿入した。衝撃で忍は背筋を仰け反らせ、髪を振り乱した。膣はこれまでの凌辱のために十分に濡れており、陳の巨根を受け入れることができた。

「締まる。最高の気分だ。中に出してから、ケツの穴もこじ開けてやる」

陳は、激しく腰を前後させ、忍の重たげな乳房を舐め回した。

その頃、他のメンバー達は、村の一角にある浴場で全身を洗い清められていた。

すず菜の担当はリンシンだった。リンシンも全裸になり、痩せ過ぎの裸身を露わにしていた。すず菜は、浴場の床に横たえられ、全身をボディシャンプーで清められた。

リンシンはすず菜の太腿を押し開き、むき出しになった股間にカミソリを当てた。

「動くと怪我するよ。ここの毛があるとアワビが良く見えないから剃ることにするよ」

手際よくすず菜の陰毛を剃っていく。

すず菜はリンシンのことが恐ろしくて堪らなかった。

言うがまま、為すがままであった。

「さあ。これできれいになったよ。それにしても美味しそうなアワビだこと」

リンシンは、むき出しにされたサーモンピンク色の膣を食い入るように見詰めた。堪らなくなったのか、膣に口を押し付け、激しい勢いで吸い始めた。

「止めてください……」

すず菜は嗚咽にむせび泣いた。昨日までは、日本を代表する女性アイドルグループのセンターを務めていたのだ。大勢のファン、華やかな生活が音を立てて崩れていくのを感じた。

周りには、グループメンバーの美奈やゆかりが自分と同じように、醜い中年女達により、膣やアヌスや乳房等、全身を貪られていた。

リンシンはしきりにすず菜の肉を食べると言ってきた。

どういうことか理解できなかったが、以前ネットで見た情報を思い出していた。

中国人は古来から数十年前まで人肉を食してきたということを。

不意にうつ伏せにさせられ、アヌスに柔らかいものを押し付けられた。首を回して背後を見ると、リンシンがすず菜の盛り上がった白い尻に顔を埋め、アヌスを舐っていた。

厳格な家庭環境で育てられたすず菜はおぞましさの余り、気が狂いそうになっていた。

「肛門も美味しいよ。焼いて食べるのが待ち遠しいよ」

リンシンはすず菜の愛液で濡れた顔を上げ、自分の方を見ているすず菜にウィンクして見せた。

「私達をどうするつもりですか？」

すず菜は必至の思いで囁くように言った。

「だから、何度も食べると言っているだろう。この脂が載った尻もオマ＊コもオッパイも全部料理して食べちゃうのさ」

リンシンはすず菜の裸身だけではなく精神まで貪るつもりなのだ。

「人が人を食べるなんて……。信じられない」

「毎年。若くてきれいな小日本の女子大生やＯＬを誘拐して食べているんだよ。それにこの国で人肉食が行われてきたことをネットか何かで見たことあるだろう？人間のお肉は美味しいんだよ。特にお前のような若くて美し

い娘の肉はホッペが落ちるくらい美味なのさ」

「……お願い。助けてください。何でも言うことを聞きますから」

「アタイの女になるなら考えてもいいわよ」

「……本当ですか？」

「嘘に決まっているだろう。この村の秘密を知った者は誰ひとり生かして返さない決まりなの」

「酷い……」

すず菜は絶句した。人生が終わったことを悟った。この村の者達に殺され、肉を貪り食われるのだ。

その頃、村の食肉工場では忍の解体が行われようとし

ていた。調理台の上には両手を両側に投げ出すようにして忍の裸身が仰向けに横たわっていた。首筋が大きく切り裂かれ既に絶命していた。両眼は大きく見開らかれ、口からは細い舌がはみ出していた。

調理服を着た陳とマーメイが忍の解体を始めた。陳は電動式のチェーンソーで忍の両腕を根本から切断していた。マーメイは鋭い切っ先の肉切り包丁で、忍の白い腹部を縦に切り開き、両手を中に入れて、素手で色とりどりの内臓を掴みだした。

内臓をすべて取り除き、代わりに米や野菜を詰めていく。詰め終わると切り口をタコ糸で縫合した。見事な手

さばきだった。何人もの人間の解体を行ってきたのだろう。顔色ひとつ変えることなく淡々と作業を進めていく。

陳はチエンソーで両足も根本から切断した。工場内には血肉の生臭い匂いが満ちていた。

その頃、村の中央にある広場では、仮設のステージが村の男達によって作られていた。　木材や竹を組んだ質素な造りだ。ステージの正面には、石畳の上に丸テーブルや椅子が並べられていた。

ステージ背後は、煉瓦造りの壁となっており、日本の有名グループの名前が、中国語で書かれた大弾幕が貼り付けられていた。グループ名の下には、中国語で人肉パ

ーティという文字が躍っていた。

午後六時過ぎ、西の空が黄昏に染まるころ、村の中央にある広さ数百畳ほどの広場には、村中の老若男女が集まっていた。

広場の片隅には大きなかがり火が焚かれ、辺りを照らし出していた。特設ステージの前に並べられた丸テーブルには村人達が席について談笑していた。真紅のチャイナドレスを着た若い女が、マイクを手にして特設ステージに上がった。

ステージの周囲に置かれたスポットライトの光が女の

美貌と抜群のスタイルを照らし出した。

「こんばんわ。紅花(ほんふぁ)です。今宵村祭りの司会をさせていただきます。今宵は小日本の人気グループによるショーを楽しんで貰います。ショーを始める前に本日の料理を楽しんで頂きます。まず、食材を紹介します。今宵の食材はメンバーのリーダー忍です。白い裸身に極上のプロポーションを持つ美女です。今年二十三歳になったばかりで肉の柔らかさは保障いたします」

司会進行役の紅花(ほんふぁ)がステージ後方のスクリーンを指差した。ＤＶＤに接続したプロジェクターの光がスクリーンに投影された。一カット目に村の食肉工場が映され、すぐに工場内に切り替わった。工場内には、グループの

メンバーでリーダー格の忍が全裸姿で工場長の陳と作業員のマーメイに凌辱されているシーンが収められていた。

細面の顔に切れ長の二重瞼を持つ美貌の忍が、泣きはらした顔をして、調理テーブルの上に横たわった陳の上にうつ伏せに載せられ、下から膣を貫かれ、犯されていた。

忍の盛り上がったむき卵のように白い尻には、マーメイが張り付き、顔を深い尻の割れ目に押し付けるようにしてサーモンピンク色のアヌスを舐っていた。忍のか細い啜り泣きに交じりアヌスを舐るピチャピチャという嫌らしい音が聞こえていた。

陳とマーメイは作業着を着ていた。暫くその状態で凌辱が続いた。観客達の視線はスクリーンに映し出される凌辱シーンに釘付けとなっていた。淫らな映像を見ながら、自分の席で自慰をする者や互いの恥部を触りあうカップルも現れた。

スクリーンに映し出された凌辱シーンは、クライマックスを迎えようとしていた。

陳の腹の上にうつ伏せに横たえられた忍の背後には、マーメイが膝を着き、忍のアヌスに極太の張形を突き刺そうとしていた。残忍な笑みを浮かべ、忍の尻を両手で鷲掴みにして、アヌスに張形の先端を押し付け一気に根本まで挿入した。忍の白い背筋が大きく仰け反り、白目をむいて失神した。それでもマーメイは忍から離れず、

激しい勢いで腰を忍の白い尻に叩き付けた。

凌辱シーンがラストのクライマックスへと近付いていた。調理台の上で全裸姿の忍が乳房を両手で隠し、陳とマーメイに命乞いをしていた。陳は右手に肉切り包丁を持ち、残忍で淫らな笑みを浮かべながら、忍に近付いていく。スクリーンは突然暗くなった。

「はい。今日はこれまでです。忍の解体シーンを収めたＤＶＤは祭りの景品としてご用意していますので、楽しみに待っていてください。それでは、料理を運びますね。食材は先ほどご説明しましたように小日本の美女肉を使った極上の肉料理ですよ。唐揚げや餃子等定番料理はも

ちろんですし、野菜や米の詰め物も楽しんで頂きます」

紅花（ほんふぁ）が右手を上げると、広場に面した食肉工場の扉が開いて、調理服を着た陳とマーメイがキャスター付テーブルを押して現れた。

テーブルの上には、両手両足と頭部が切断された胴体が載せられていた。胴体の横には、死化粧を施された忍の頭部が白い皿の上に立てられていた。

また、胴体の周囲には、唐揚げや餃子等の料理が大皿に盛り付けられた。広場内に肉料理の濃厚な匂いが満ちていく。陳とマーメイは料理が載せられた皿を各テーブルに運んでいた。

皿の料理をすべて各テーブルに運んでから、陳は、忍の胴体が置かれているテーブルに戻り、肉切り包丁で盛り上がった腹部を縦に切り裂いていく。切り口から大量の湯気が沸き上がった。周囲に得も言われぬ胃腸を刺激する匂いが流れ出し、観客が深いため息を漏らした。

陳が大きく切り裂かれた切り口を両手で大きく開け、マーメイが中に詰まっていた野菜や米を大きなシャモジですくい、深皿に盛っていく。観客達が席を立ち、我先にと、熱々で肉汁が染みた野菜や米が入った深皿を受け取っていった。

「こいつは最高に旨い！忍という小日本の女は美しいだけではなく肉も最高に美味しいよ！」

観客席から次々に歓声が沸き上がった。

「美味しい料理も行きわたったようなので、今夜のショーを始めますね。陳さん。私の分も残しておいてくださいね」

再び紅花（ほんふぁ）が右手を上げると、広場に面した家の大扉が開けられ、超ミニスカートのステージ衣装を着たすず菜達が、村人に手を引かれ現れた。皆二十歳くらいの若さで、ミニスカートから伸びた白い太腿に村人達の視線が釘付けになった。

すず菜（な）は礼服を着たリンシンに手を引かれていた。メンバー達は、すぐにステージ上に上げられた。強烈なスポットライトが当てられているのでステージ下で繰り広

げられている人肉宴会は見えなかった。ただ、メンバー達は、皆、異様な雰囲気に呑まれていた。

「一曲目をご紹介します。曲名は……です。一曲目の歌が終わりましたら、彼女達が着ている服を一枚だけ脱がせていきます。服を脱がせたいと思う人は手を上げてください！」

司会役の紅花（ほんふぁ）が中国語で説明すると、観客席から大きな歓声が上がり、ほとんどの村人が興奮した面持ちで手を上げた。一方すず菜達は、中国語が分からず、ただ異様な熱気を感じ、茫然と立ち尽くしていた。

ステージから一旦降りた紅花(ほんふぁ)が、村人からメンバーの人数と同じ十人を選び出した。若い男女や肥え太った中年女や頭部が禿げ上がった皺だらけの老人もいた。

「それでは一曲目をスタートします」

広場にグループの代表曲である軽快なリズムの曲が流れ出した。すず菜達は顔を強張らせながらも曲に合わせてステップを踏み始めた。ステージに上がる前、リンシンから一番歌が上手だった者だけ暫くの間生かしてやると言われたのであった。

数分後、一曲目が終わった。広場は異様な熱気に包ま

れていた。不意に歓声が沸き上がり、ステージ上に村人達が殺到した。センターにいたすず菜の前に若くて美しい女が、淫らな笑みを浮かべながら、すず菜のことをじっと見つめていた。

「何？何なの……」

すず菜は思わず独り言を言っていた。女がにやりと笑い、すず菜の身体に抱き付いてきた。

「アタイ。スズナチャンノフアンナンダ。イツモネットでミテイルヨ」

耳元で、たどたどしい日本語を囁かれた。

頬を舐められ、唇を吸われ、股間に手を入れられた。

白魚のような指先が膣をかき回してきた。

思いもよらぬ力で押し倒され、ミニスカートを捲りあげられた。ビキニのパンティが両手で掴まれ、一気に引き下ろされた。

白くすべすべでシミひとつない美尻が露わにされた。

その若い女は、すず菜のむき出しにされた尻の割れ目に顔を押し付け、激しい勢いで舐り始めた。

柔らかい女の舌がアヌスの周囲で嫌らしく動き回っていた。時より激しく吸われた。

村に監禁されてから、リンシンや村人達に激しい凌辱の連続だった。食い殺すと言われ続け、希望を失っていた。嫌悪感を感じながらも身体は快感に反応していた。

すず菜は、訳も分からず茫然自失の状態だった。柔ら

かい舌でアヌスを舐られ、膣に根元まで指を入れられた。これまで感じたことのない快感が背筋を走り抜けた。泣き叫びながら、女の顔尻の割れ目を押し付けた。

「キモチイイデショウ。サヨノコウモントオマ＊コハアタイガタベテアゲルネ」

「嫌！そんなことしないで！お願い！」

すず菜は女にアヌスを舐られ、膣を弄られながら、絶頂に達し女の顔を愛液で濡らした。

女は満面の笑みを浮かべながら、すず菜の膣に口を付けて大きな音を立てて吸い上げた。

第三章　生贄へと続く